

ともに暮らす。 ともに生きる。



夢は園芸療法施設 農業の秘めたる可能性に チャレンジ

「平田弁がすんなり出るようになり
ましたよ」と笑顔で語り出した高野哲
也さん。今年、平田村で14回目のお正月
を迎えた。

埼玉県で、中学の社会科教師をしていた
高野さん。就農を志したきっかけは、
家族が患った心の病だった。治療が進む
ほどに葉が強くなり、量も増える。葉に
頼らない治療法はないのかと調べる中で
知ったのが、園芸療法と呼ばれるセラピ
ーだった。当時、日本ではほとんど行われ

ていなかった。完治しないまでも苦痛を
緩和することができればと、自らの手で
その一歩を踏み出す決意を固めた。
就農支援ガイドセンターや知人のつて
をたどり、各地の見学を重ね、やって来
たのが平田村。「ちょうど村民大運動会
の当日で、グラウンドで村長の歓迎を受
けた」と当時を振り返る。居住開始は
平成6年12月、翌年春にはバラ栽培をと
意気込んでいたが、計画通りには行か
ず、「自分としては、農業の多面的な可
能性を追求するつもりもあった。しか
し、知識も技術も経験もない現実」に直
面する。

300坪のハウスの修繕やバラ栽培の研
修に生活の大半を費やし、ようやく栽
培開始にこぎつけた時には、居住開始か
ら一年以上を経過していた。その後、さら
に300坪のハウスを改修、ブライダルフ
ラワーを中心とする独自の販売ルート
確立にも邁進した。「アレンジに必要な
植物も栽培するようにし、一般価格より
格段に安く提供できる」ことが成功につ

ながっている。結婚式シーズンには、一日に
2千本以上のバラを出荷する。

高野さんには、もうひとつの顔があ
る。地元の生産者組織「ひらた高原朝採
り野菜の会」の事務局長として、販売力
向上になくはならない存在なのだ。朝
収穫した野菜を販売用に包装し、生産
者名のシールを貼って、郡山やいわきの店
舗へと配送する。「生産者は、メーカー。
販売促進にもエネルギーを費やすのが
当然」と、販売店との交渉や営業に東奔
西走している。「出荷した量販店に足を
運び、売れ行きを観察したり確認を行
い、会員のレベルアップを図りたい」と意
欲を燃やす。

大輪で褪色の少ない品種を中心に約
20品種を栽培する高野さん。「希望日の
1週間位前に注文いただければ、切り花
でもアレンジメントでもお届けできま
す」とのこと。今年の母の日は、真っ赤な
バラの花束をプレゼントしてみては。



「自分では、平田村にすっかりとけ込んでいると思ってます」と高野さん



厳しい気象状況の中でも、品質の高い
バラを提供するために、あぶくまの土壤
や気象条件に合わせた栽培管理法を熱
心に研究。高野さんは、アレンジメント
やブーケなどにも才能を発揮する